



同社の主力加工工場である東京工場群

独立系の鉄鋼一次指定商社、鋼板加工センターとして、「鉄」を60年間供給し続けている古賀オール株式会社。

宮城県にも支店・工場を持ち、3月11日に起きた東日本大震災の影響も受けたが、幸い深刻な被害は免れた。だが、混乱した状況のなか、原料が手に入らないという危機に見舞われる。しかし、それでも製品を供給し続けられたのは、これまで付き合いしてきた取引先などから、温かい手が次々と差し伸べられたからだ。「力になることがあれば相談してください」という声は、同社の支えとなった。

「今まで一步一步積み重ねてきた関係に間違いはなかった。私の目指す、お取引先との〈調和〉がなされているのを実感できました」と、古畑勝茂社長は語る。

リーマン・ショックを ともに耐えた社員を信じる

創業者である父・勝人氏も重きを置いていた「信頼」は、今も社内で息づいている。リーマン・ショック時、売上は一時、通常の6割程度にまで落ち込んだ。このとき古畑社長は「うちは絶対にリストラはしない。一緒に頑張ろう」と社員を鼓舞し続けたという。「社員が不安を感じ、社内にはばかり目を向けていたら、外（顧客）へ目を向けられるはずがあり

ません。私にとって『家族』とも言える社員に安心して働いてもらい、顧客を守って欲しかったんです」。

この想いは社員にもしっかりと伝わる。そして全社一丸となって辛い時期を耐え抜き、売上は9割にまで回復。その矢先の震災被災である。しかし、過去に会社の危機を乗り越え、自分たちの居場所を守り切った社員たちには自信がある。自発的に動けるようになった今、今回の危機も乗り越えられると、古畑社長は社員のを信じている。

他社のバックアップこそが 自社の存在意義となる

社員の自発的な姿勢は、年1度行われる「小集団活動評議会」にもよく表れている。社内の営業、総務、生産などの各部署を40チームに分け、「安全」「改善」などのテーマに沿ってアイデアを募る。年末、晴れて1位に選ばれたチームは表彰され、即実行に移される。これは社員の士気を高めるのにも一役買っている。

「最近では社員に気づかされてばかりです」と語る古畑社長は、自ら率先してさまざまなアイデアを考える人でもある。自分とはひと味違った、社員の輝きある発想を知る機会として、評議会を毎年楽しみにしているようだ。

現在の古畑社長の目標は、日々の業務を着実にこなし、他社のビジネスをバックアップして評価を得、さらなる信頼を深めること。さらにそのなかで、東北の復興に尽力することだ。会社を支えてくれる顧客、取引先、従業員——「人」を大切にし、彼らとの〈調和〉を糧に成長していく。古畑社長の真摯な思いは、これからの時代、環境や景況の変化に対応し、継続的な事業を行ううえで欠くことのできないものである。

顧客、取引先、社員 調和が企業を守る



代表取締役社長 古畑勝茂氏

Corporate Profile

古賀オール株式会社

所在地：東京都中央区
従業員：320名
設立：1951年
事業内容：鉄鋼一次指定商社、コイルセンター他